



Title	日本における被服デザイン教育の黎明：宮下孝雄を中心に
Author(s)	鈴木, 桜子
Citation	デザイン理論. 2017, 69, p. 52-53
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/65016
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日本における被服デザイン教育の黎明

— 宮下孝雄を中心に —

鈴木桜子／杉野服飾大学

はじめに

現在に至る日本のファッション教育の歴史は、明治以降、和洋裁縫の技術教育にはじまり、女子教育の一環として教員の養成、職業婦人の育成、現在に至っては高度な知識や技術を身につけた専門的職業人へと、時代と共に学校制度の変化に応じて専門学校から大学に至るまで進展を遂げてきた。現在その修学領域は繊維科学から被服デザインに至るまで、理系、人文系、芸術・デザイン系と多岐にわたっている。

宮下孝雄（1890～1972）は、図案家、図案理論家として森谷延雄らとともに近代日本におけるモダン・デザイン受容の橋渡しをし、デザイン教育において功績を残した人物である。しかし、宮下が戦後から晩年にかけて女子教育の場で被服領域でのデザイン教育に力を注いでいった側面についてはこれまで触れられることはなかった。

洋装化の時代において洋裁教育の現場では型紙、裁縫といった技術教育に重きが置かれ、洋服のデザインについては欧米の模倣にとどまっていた。宮下はその脱却を図るため、服のデザインを理論的に捉えようとする動きがまだ無かった中で、それに取り組み、実践につなげていこうとする。その功績は著作としても多く残されている。

今回、宮下の著作を手掛かりに、彼の被服デザインに向ける理論的視点を捉え、黎明期における被服デザイン教育について検証した。

宮下孝雄の著作と理論

宮下は1910年に東京高等工業学校図案科を

卒業した後、東京府立工芸学校の教諭となり、文部省の在外研究員として欧米留学を経て、東京高等工芸学校で22年に亘り、図案学と色彩学を教えていた。その後、帝國工藝会（1926）、デルタ図案研究所（1928）の設立に関わり、更に1933年からは東京女子専門学校、後の東京家政大学で被服教育に深く関わるようになる。

宮下は1918年以降、図案雑誌等に継続的に寄稿をしていたが、色彩や図案に関する理論書が相次いで刊行されるのは1926年からである。初期の代表的な著作には『装飾研究の構成』（1928）、『新図案の基礎』（1931）があり、論考を総じてみると、装飾と構図の事例を図解のもとに数値を当てはめ科学的・数学的な見方を基本としている。そして宮下が図案の原則として捉える「律・調和・権衡」は後に被服デザイン理論においても有効に繋がっていくものとなった。

宮下の著作の中で服飾について触れる最初のものに『家庭工藝：図案の構成指導』（1937）がある。その最終章に「服飾美の構成」が設けられた。それは宮下が被服デザインに関心を持ち、洋装の実践的指南を与えようとするものであり、その後の被服デザイン理論の構築に向けての序章となるものであった。その後刊行されていく『ドレスの配色と調和』（1949）、『被服デザインの原理と応用』（1951）、『被服デザインの基礎』（1953）等は、専門学校から大学や短大、一般向けにも書かれた教科書になっていく。既に図案理論書を著していた宮下にとっては新たに着装者の体型、被服素材、デザインの動的表現といった被服ならではの観点が加わることになる。

「デザイン」と「デザイナー」という言葉

「デザイン」や「デザイナー」という言葉は1920年代前半からファッションの分野が先行して使い始め、他のデザイン分野では「図案」「意匠」「図案家」があてられてきた。宮下自身も著作の中で「図案」や「意匠」の言葉を用いてきた上で、1951年以降、「被服デザイン」の言葉も用いていく。しかし、それまで「デザイン」や「デザイナー」は言葉の定義が明らかにされてこなかったために、戦後のデザインブームの中で言葉が独り歩きをしてしまう傾向があらわれた。本来デザインが「構想から計画、美的造形に至るプロセスを秩序をもって示していくこと」であり、デザイナーがその「オーガナイザー」であることからすれば、洋裁教育や被服デザイン教育ではその認識が曖昧であったといえよう。宮下自身も「被服デザイン」に対しては「人体の各部の権衡に適するために素材と共に形と色よった調和の総合的な美を達成すること」とし、デザインのプロセスに向けられた視点はあまり強いものではなかった。

被服デザイン教育の軌轢

宮下の著作による被服デザイン理論の構築の試みは、その後も中田満雄、山崎勝弘、塚田敢らによって受け継がれ、被服デザイン教育の振興に功績を残していった。しかし一方で理論と技術の問題が明らかになっていったことも事実だった。それは当時お茶の水女子大学講師であった石山彰による「被服文化」(41号1956年、被服文化協会)への寄稿で議論を巻き起こすことになる。「服装デザイン教育の再検討」と題されたその内容は、造形意識を高めようとする理論家と洋裁から育った裁縫技術者との対立的な関係を指摘し、洋裁家教員によるデザイン教育の問題をあげたものであった。つまりデザインの理論と技術

が統合されずに乖離が見られるというもので、被服デザイン教育が未だに確立されていない状況が明るみになった。ここで宮下の名が出てくることはなかったが、後に宮下自身も「被服教育においてデザイン教育が認められてこなかった」と述懐している。被服教育自体にかつての洋裁教育の体制が残り、新たにデザイン理論の重要性が叫ばれてもそれが根付くには難しい局面があったことが窺われる。

おわりに

宮下が被服デザインを理論的に扱おうとする姿勢は、服のデザインが理論的な知識と実践の上に美的表現として成り立つことを示そうとする試みであった。その取り組みは被服デザイン教育の観点でパイオニア的存在であった。しかしここであえて黎明期にあった被服デザイン教育について批判的に見るならば、それが究極どこに向かうのか当時被服教育に携わった教授陣らによって明確にされてこなかった点が指摘できるだろう。被服デザインの理論書として書かれたものは一般家庭人から専門に学ぶ人まで幅広い対象に向けられたものだった。これはともすれば一般家庭人の衣生活や趣味の延長としてのデザイン教育に向けられたものであり、専門的職業人のデザイン教育を対象として向けられたものでもある。また理論教育と技術教育の統合の重要性を謳いながらも、被服デザインはその理論的裏付けがなくても、洋裁技術があれば個人の感覚的なものによって色や形としてできあがってしまうことがある。決してデザイン教育における感覚的側面を否定するものではないが、理論によって裏付けされた感覚によってデザインの美的表現が客観性をもって生まれることの重要性をここで指摘しておきたい。そこに宮下が取り組んできた被服デザイン理論の試みが再評価される理由がある。